メシェレ いなべ

ふれあいのまちづくりをめざして　2022.3.3　Vol.53

メシェレいなべは いなべ市民と共に 人権を考える会です。

きょうたもつ だけど心は すぐとなり

～コロナ禍の中でも、人と人とのつながりを大切に!!～

コロナ禍の中でも、各地区で工夫を凝らしながら、施設訪問、人権の花、地域交流活動、街頭啓発等々、「心はすぐとなり」を実感できる機会を創ることができました。これからも市民の皆さんと共に「人と人とのつながり」を大切にしたいです。

★人権の花★

育てよう

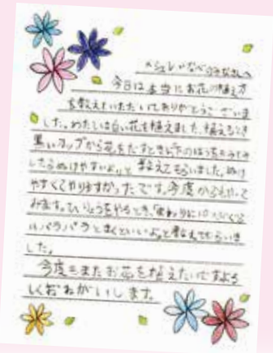
石榑小（11／11）
笠間小（11／13）

咲かせよう

思いやり

丹生川小（11／17）
三里小　（11／24）

やさしさ



大安地区では、各小学校、PTA、地域の皆様の協力で、通学班の集合場所や学校にプランターを設置しました。学校と相談し、三密を避けて、代表の学年を決めて植えたり、班長が代表で設置したり、出来る範囲で工夫して実施できました。集団下校や校内放送で活動の紹介もできました。春に向けて、子どもたちと「人権の花」を育てていきます。

★施設訪問①★ 訪問介護事業所：「えんむすび」さん

メシェレ藤原地区と北勢地区は、訪問介護事業所「えんむすび」を訪問しました。認知症の人や家族、誰もが気軽に立ち寄れる「おれん家“カフェ」が開催されていました。代表の林淑乃さんから、福祉の道へ歩んだご自身の生い立ちから、えんむすびの活動について、福祉と地域づくりにかける熱い思いをたっぷりと語って頂きました。交流会では活発に意見交換ができ、大変有意義な会となりました。

この頃は、隣近所にもなかなか遊びに行くこともなく、えんむすびを利用されている人は、明るく楽しそうでした。これからますます高齢者が増え、認知症の人が増えてくる。自分も例外ではないが、このような施設が本当に必要でひしひしと感じることができました。藤原全体に広がっていくことを願っています。

この先介護を必要とする人が多くなることは分かっているから、今介護する人を育てたり、資格をとって指導者を増やしたり、つながりをつくったり、行政やいろんな組織とのネットワークを広めたりなどしていると言われました。それは、自分が気持ちよく介護されることにもつながるからと。将来を見据えて、今やっておかなければならないことを着実に進めてみえることがすごいなと思いました。福祉の基礎をつくってもらっていることに感謝します。

★施設訪問②★ 子育て支援センター「なかよしひろば」

員弁地区では、地域交流活動でお世話になっている子育て支援センター「なかよしひろば」を訪問し、職員の方から、コロナ禍の中での取り組みやご苦労、又、意外な発見についてお話し頂きました。昼間、家で親子二人きりの生活の閉塞感が、センターへ来て他の方と大人同士の会話が出来て、気分転換になった。又、コロナで在宅勤務の為、父親の参加が増えて良かったとの事でした。毎日利用者の方が帰られた後、絵本の消毒もされていると聞いて、頭の下がる思いと感謝の気持ちと共に、絵本をプレゼントして研修を終えました。

★街頭啓発★

人権週間（12／4～12／10）

人権デー（12／10）の取り組みとして、各地区【藤原：新庁舎＆にぎわいの森、北勢：マックスバリュ、員弁：ヨシヅヤ、大安：イオン大安】で街頭啓発活動を行いました。コロナ禍で、市民の皆さんとの交流を持てませんでしたが、この日は、市内の様々な世代の方とふれあうことができました。

★本のプレゼント★

員弁地区の地域交流活動として、児童書専門店「メリーゴーランド」増田喜昭さんの「ブックトーク」が毎年の恒例行事でしたが、コロナ禍で開催できませんでした。子どもたちに少しでも元気になってもらおうと、増田さん推薦の児童書を、東小・西小の子どもたちへ、手書きのメッセージを添えて届けました。子どもたちの嬉しそうな笑顔が何よりの成果です。

メシェレいなべ事務局：いなべ市員弁庁舎内　TEL49-5307　FAX49-5308　E-mail：meschre04@image.ocn.ne.jp

コロナウイルスと私たち

今、コロナ禍の中で、私たちにできる事とは!?

本年度のメシェレいなべの活動テーマは、「コロナウイルスとわたしたち　～きょりたもつ　だけど心は　すぐとなり～」です。コロナウイルスによって社会全体にソーシャルディスタンスが求められ、メシェレが願う「人と人との関わり」が閉ざされてしまっています。ウィズコロナと言われますが、コロナウイルスとどう向き合って取り組んでいったらよいのか、私たちの大きな課題です。

コロナ以前は、広く市民の皆さんに呼び掛けて映画会や講演会、交流行事をすることが中心になっていましたが、基本は、やはり人と人の関係作りです。コロナウイルスから、メシェレの活動の原点を今一度見直すと共に、このテーマに込められている「心はすぐとなり」という関係づくりの機会をどう創り出していったら良いのか、二人の講師先生のお話しから学んだことをお伝えします。

差別者として自分がいる限り、自分の人権もない

内容はとても深く、この意味は?と考えることばかりでした。「人権」「対等」「差別」等の言葉は、尾畑さんが差別される弱い立場の方たちからの声を聞き続けて考える言葉と、私は国語辞典で知った言葉とは重みがまったく違うと感じました。「差別者として自分がいる限り、自分の人権もない」この言葉が心につきささりました。しかし、自分が知る小さな世界で、知らぬうちに差別する側に立っているかもと思うと、恐ろしいと思うと共に、こんな自分に何ができるのだろうと、少し悲しい気持ちになりました。小さなことでも関心を持って、少し何かできれば、と今は思います。

関わり合い、互いに知り合う場を

ハンセン病患者、コロナ患者、自分で選べない人種、男女など、自分が弱い立場にならないように一線を引く、関わらないようにして自分を守ったと思う。自分を守るために、自分より下だと思えるよう差別して切り離そうとした。隔離することで、自分たちの問題ではない、自分の生活に入り込まないと思い、患者の人権を考えることはないままだったと思う。だから、関わり合う場をつくり、お互いに知り合うようになれば、お互いの人権も守られていくと思う。講演を聴いたり、感想を言い合うことで、間違いに気づけたり、お互いの思いを聞くことができて、よかったと思った。

テーマ①　きょりたもつ　だけど心は　すぐとなり

講師先生紹介

講師の尾畑文正先生は、同朋大学の学長を務められ、現在は同大学名誉教授。浄土真宗の僧でもあり、仏教学者としても幅広くご活躍されています。2015年から3年半、真宗大谷派南米開教監督としてブラジルに在住。中日新聞でコラム（今週のことば）を担当され、コラムで本年度のメシェレテーマのサブテーマとなった人権標語を題材に取りあげて頂いています。

人権意識は高い方だと思っていたが、コロナが広がれば、人がたくさん集まって飲食やっているからじゃないの、若者が路上飲みして騒いでいるからじゃないの、と、自分の意識の深いところに沈めていた感情が出てきてしまった。ハンセン病については知っていても、テレビで手指が変形してしまった人が映し出されると、目をそらし見ないようにしてしまう自分がある。人権を尊重しあう事は、ほとほと難しい事だと思った。コロナは、何を大事に考えなければいけないのかを地球に問いかけてくれたと思う。尾畑先生のおだやかで強い語りかけがとても良かった。

コロナが私たちに問いかけてきた事とは!?

子どもたちよ大志をいだけ!!

今の学校の現状が良くわかり、先生方も頑張ってみえることもわかりました。コロナは単に身体的な健康を阻害するだけでなく、子どもたちの精神的な健康にも大きく影響するなんて。今までの常識を覆すコロナ禍。コロナウイルスは学校教育の重要な役割である「社会性」を育てる機会を阻害している。これにどのように対応すべきか?　検討していく必要性があります。時代により、社会と子どもたちの係わり方は色々あると思いますが、私は子どもたちの“したたかさ”に期待しています。『子どもたちよ大志をいだけ』とエールを送ります!

一番耐えてきたのは子どもたち

先生のお話の中で、「このコロナで一番耐えてきたのは子どもたちではないか」という言葉に、心底うなずいてお聞きした。友との関わりを失い、家庭の中では多くのストレスに耐えてきたことも現実として理解してきた。しかし、今日の先生のお話で、改めてコロナで最も耐えてきたのは、日々子どもたちと接し、生活の隅々まで心を配り、関りを作ってきた先生たちと子どもたちとの関りが、「休校」によって絶たれたこと。先生たちの苦悩に思いを寄せることができました

テーマ②　いなべ市の子ども、学校の様子から

けなげな子どもたちを支えたい!!

子育て世代の家庭にとって、学校は日常生活を支える場だったんですね。さらには学びの場で育ちの場だと確信しました。その場を奪われたことの代償はこれからきっと現れてくるのでしょう。行政もそのあたりをしっかりととらえてほしいと思いました。グループの中で「どんな困難な状況でも案外子どもはしたたかに、たくましく生きるんじゃないか。」との発言もありました。「子どものしなやかさ」でもあると思いました。「子どもは希望の星」なんでしょうね。だからこそ、けなげな子どもたちを支える人になりたいとの気持ちがふつふつと湧いてきます。「野菜を提供したい」「空き家利用を考えたい」との声、早速行動したいです。

講師先生紹介

講師の竹内康則先生は、中学校教師として、これまで東員町、いなべ市内の各中学校に赴任されています。現在はいなべ市教育委員会学校教育課の指導主事です。人権教育担当者としても人権福祉課やメシェレいなべの活動にも連携・協力を頂いています。

お二人の先生のお話、私たちの心に強く響きました。改めて、相手を尊重する心を持って、互いを認め合って、協力し合って、共に生きることの大切さを認識しました。

先日、中日新聞の発言欄に、中学３年生の女の子の作文が載っていました。「コロナ禍で、学校が休校になったり、感染防止のため学校生活が一変したり、大好きな行事が中止されたりすることが、当たり前のようにありました。私はその時、日常生活こそが平和なのだと思いました。大好きな家族や友人と過ごすこと、それは当たり前のようで、当たり前でないことを、身をもって感じました。平和とは、戦争がないことは勿論、普段の生活にある小さな幸せのことなんだと思いました。これから小さな幸せを沢山見つけていきたいです。」と。

こんな記事を見つけ、とても嬉しくなりました。一日も早いコロナの収束を願い、子どもたちが以前のように伸び伸びと明るく生活できる日が来ることを願うばかりです。

メシェレいなべ会長　水貝和代